

月刊 わらじ 6月号

特集 まちなさい



二〇二五年六月一日 毎月一回一日発行 通巻五六一
一九八四年十月四日 第三種郵便物認可 頒価二〇〇円

5月14、15の両日、県庁みどりの広場で、「かつぼ 28周年フェスタ」が開かれた。「県庁内福祉の店アンテナショップかつぼ」が主催。県障害福祉推進課がPRに努めてくれたことも奏功し、2日間で過去最多の延べ40団体が店を並べ、地域住民や県職員でにぎわった。写真はくらしセンターべしみの店頭での大野知事との交歓風景。

かつぼは社福・埼玉県身体障害者福祉協会と一社・埼玉障害者自立生活協会による運営協議会が受け皿となり、県庁第2庁舎1階ロビーで97年4月から営業している売店。かつぼの初心は、県庁という場で障害者の地域生活や共に働く様子を、県職員さんはじめ来庁者の方々に知っていただき、共に生きる社会のありかたを考え合いたいということ。だから、専従職員1人と県内各地から日替わりで出勤してくる障害者メンバーと介助者・支援者によって切り盛りしている。店や庁内定点販売での日々がSNSで発信されている。そんなかつぼはいまの福祉サービスや雇用の制度から閉め出されている。だからこそ貴重な社会資産なのだ。

かつぼはまた、「県庁内職場体験(体験型職場実習)」のコーディネートも、県から受託している。この特徴は介助者と共に実習すること。だからどんな重い障害者でもチャレンジできる。スタンプ押しとかPC作業とかあるが、できなくてもOK。受け入れ課や本人、コーディネータと考えることから始まる。通勤や実習時の介助のありかた、職場でできること、できないことも含め考え合う。職場に共にいる緊張感。施設に戻ってから「変わった」との評価はしばしば。中には施設の応援もあり、後日就職した人も。能力があるから働くのでなく、あたりまえに生きる環境を探るために県職員さんたちと共に働く。まさに「鳥は空に、魚は水に、人は社会に」。

小さな新聞 6月号

THE CHISANA SHINBUN
第00505号(月刊)わらじの会25

2025.6.14(日)
発行所
わらじの会
谷中川 恵 会館

自立生活めぐりぶつちやげトーク

一社・埼玉障害者自立生活協会の若手理事が語る

5月25日、一般社団・埼玉障害者自立生活協会の総会が開かれた。総会終了後「社団・若手トークまつり」が開かれた。昨年度、県内各地を巡り、若手の当事者や職員との交流・座談会「若い衆トーク」を行い、今回は公開のトークセッション。司会を辻浩司さん。

藤森慎太郎さん(センター2)は、ふじみ野市の全身性障害者通学等介助人派遣事業を利用して大学、大学院に通学。その体験をテーマに修士論文を書き卒業。センター2の職員となった。諏佐蒼真さん(ねこの手)は、母が自分がいなくなっても社会で生きられるように、特支学校卒業後、介助付き一人暮らしへと押し出し、一人暮らしを楽しんでいる。鈴木吉伸さん(あぐり)、遠藤教充さん(あぐり)、鬼沢なみえさん(あぐり職員)、鈴木さんは一番若手。遠藤さんは以前05にいて、現在は一人暮らし。農園のイベントには休日でも参加している。橋本和憲さん(ノイエ)は家族と同居し、ヘルパーと外出しそれなりに充実した日々を送っている。森住由香里さん(B型・世一緒)は、結婚・出産・離婚・学校事務の仕事・退職などなど、現在一人暮らし。飯田渉太さん(べしみ)は、べしみの数少ない若手として、悩んだり、怒りながら頑張っている。

5月23日、生活クラブ生協越谷センターで「うんとこしょ 共同除草作業」が、生活クラブ生協越谷ブロック地域協議会の主催で行われた。同センターが敷地の除草を就労継続型事業所せんげん台「世一緒」に年2回委託し、同地域協議会に属する生協の支部や各ワーカーズコレクティブ、市民ネットワーク、NPO法人障害者の職場参加をすすめる会、NPO法人かがし座(わらじ細工)などが参加して、一緒に体を動かして作業した。

●本田勲さん(春日) 日都市、一時退院する。無事回復し退院。
●長岡南さん(名古屋) 今井、水谷さんら金沢、能登へ二泊三日の旅。
●磯崎純さん(春日) 引越した。

●菅野美奈さん(春日) アナフィラキシー、引越した。